



Title	第二言語場面相互行為実践研究の困難
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化共生と言語教育. 2008, p. 9-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25847
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第二言語場面相互行為実践研究の困難

西 口 光 一

0 はじめに

データ 1

1H: (玄関で靴を履きながら) あ、デロンギ、ついてるわ。消してくれる。

2W: はい。(リビングに戻る。)

これは日常のごくありふれた夫と妻の会話である。冬のある日、二人は今まきに出かけようとしている。玄関で靴を履いている夫(H)はふと、ヒーターを消し忘れたことに気がつく。この家庭ではこのように二人で出かけるときにヒーターを消すのは主として夫の役割である。妻(W)はたった今リビングを出たところである。そのような状況でHは「あ、デロンギ、ついてるわ。」と自分が気づいたリビングの状況を口にし、そして、リビングのそばにいる妻にヒーターを消すことを依頼するのである。HとWはいずれも大阪生まれで大阪育ちで、二人の話し方は現代の大阪方言の特徴を備えたものとなっている。データ1のやり取りあるいは同様のやり取りは、この二人の間では何度も交わされている。

本稿の課題は、第二言語習得の関心から第二言語話者が対話者となっている相互行為実践(Hall, 1995)を研究することにかかわる困難について議論することである。本稿では、何気ない日常の会話だがそこにさまざまな興味深い側面を潜在させているやり取りであるデータ1を分析のための基本的な素材としてそうした議論を進めていく。

1. 傍観者の理解

唐突であるが、本稿の読者はデータ1の会話を即座に理解できただろうか。少し考えさせられたらどうか。あるいは、「あれ?」と思う瞬間があっただろうか。以下、いろいろな種類の主体がデータ1の会話の現場に居合わせたとしての仮想的な話に基づいて議論を進める。

1-1 「デロンギ」

一部の読者は1Hを即座には理解できなかったはずである。原因は1Hの冒頭の「デロンギ」である。「デロンギ」とはイタリア製のオイルヒーターであり、「デロンギと言えばオイルヒーター」と言っているほど、オイルヒーターで有名なメーカーである¹。そして、この家庭ではそのオイルヒーターを「デロンギ」と呼び習わしているのである。同じよう

にデロンギを家庭で使用し、それを「デロンギ」と呼び習わしている仮想的な主体1は、1Hを何の支障もなく理解できたであろう。

次に、同じようにデロンギを家庭で使用しているが、それを一般的な呼び名で「ヒーター」と呼んでいる主体2は、「ん？ ああ、デロンギ、ヒーターね。」と一瞬の言い換えがあつて、1Hを理解しただろう。「デロンギ」と呼ぶことに気取りを感じてむしろ「ヒーター」と呼んでいる人であれば、「Hさん（あるいはH家）はちょっと気取ってるね」とも感じたかもしれない。

そして、デロンギを知らない主体3は、1Hを「あ、デロンギ、え？『デロンギ』って何？、ついてるわ。消してくれる。『デロンギ』は『ついている』ということがあり、それを『消す』ということもある。『デロンギ』とは、何かストーブ類か、家電の類か？」（太字はHの発話で、斜体字は主体の内言。以下同様）と聞く。そして、続いて2Wの発話を「はい。あ、Wは了承した。この二人の間では『デロンギ』で通じているんだ。」というふうに聞き、Wがリビングに戻ってヒーターと認められるものを消すのを目撃してようやく「デロンギ」がヒーターであることを知り、当該のやり取りが、Hがヒーターがついているので消してくれとWに依頼し、Wがそれを了承したというやり取りになっていることを知るであろう。

主体3による現場での理解の過程を、内言を添えながら模式的に示すとプロトコル1のようになる。斜体字は予想される理解者の内言である。

プロトコル1：主体3の場合

1H： あ、デロンギ、

え？「デロンギ」って何？

1H： ついてるわ。消してくれる。

「デロンギ」は「ついている」ということがあり、それを「消す」ということもある。「デロンギ」とは、何かストーブ類か、家電の類か？

2W： はい。（リビングに戻る。）

あ、Wは了承した。この二人の間では「デロンギ」で通じているんだ。（Wがヒーターと認められるものを消すのを目撃する。）あ、Wはヒーターを消した。「デロンギ」というのはヒーターか。Hはヒーターを消してくれと頼んだんだ。

1-2 「消す」

次に、「消してくれる」の部分に注目する。余計な煩雑さを避けるために、「デロンギ」の部分は「ヒーター」と直してデータを提示することとする。

さて、（電気の）ヒーターは、「消す」ののだろうか、それとも「切る」ののだろうか。筆者の身近な知人に聞いてみたところ、「消す」派、「切る」派、「両方あるいはどちらでも」派に分かれた。いずれにせよ、「消す」派と「切る」派がいることは確認できた。Hは「消す」派のようである。では、「切る」派の主体が当該の会話の現場に居合わせたと

きはどのように聞くだろうか。これを主体4の場合として上と同じように傍観者の内言を添えて示すと以下ようになる。

プロトコル2：主体4の場合

1H： あ、ヒーター、ついてるわ。消してくれる。

ふむ。 ふむ。 「消してくれる」？「切ってくれる」でしょ！

2W： はい。（リビングに戻る。）

ふむ。 Wはヒーターを切りに行った。

このように、「切る」派の主体にとっては当該のやり取りは、HがWにヒーターを切るように頼み、それを了承してWがヒーターを切りに行ったというやり取りとして理解されるのである²。

1-3 「ついてるわ」

次に、「ついてるわ」の部分に注目してみよう。

本稿の冒頭でデータ1を初めて読んだ日本語標準語話者の読者は、Hを女性と見たであろう。しかし、実際には先に書いたようにHは大阪出身の男性である。ゆえに、「ついてるわ」の部分は、「低低低高低」のようなアクセントで話されているのである。1-1と1-2の分析でこのような側面が問題にならなかったのは、主体1から主体4として実は大阪方言を話す主体が想定されていたことを示している。

標準語女性話者による「あ、ヒーター、ついてるわ」は単なる発見の告知である。また、標準語で、「わ」を省いて「あ、ヒーター、ついてる」とすると、男女を問わない発話となるが、やはり単なる発見の告知になってしまう。標準語話者であれば、この状況では、男女にかかわらず、「あ、ヒーター、ついてる（わ）」よりもむしろ、「あ、ヒーター、消し忘れちゃった。」と自分の失敗を告知する発話をするであろう。このような事情を考えると、現場で当該のやり取りを聞いて、声からHが男性であることを認識した標準語話者は、その会話を以下のように理解するであろうと予想される。[]内は直前の言葉のアクセントを示している。

プロトコル3：標準語話者の場合

1H： あ、ヒーター、ついてるわ〔低低低高低〕。

ふむ。 「ついてるわ」〔低低低高低〕？ わっ、大阪の人だ。

「消し忘れちゃった」？

1H： 消してくれる〔低低低低低低〕。

ふむ。 変なアクセント！

2W： はい。（リビングに戻る。）

ふむ。 Wはヒーターを消しに行った。

さらに、標準語話者で「切る」派の場合であれば、理解の過程は以下のようなだろう。

プロトコル4：標準語話者で「切る」派の場合

1H： あ、ヒーター、ついてるわ〔低低低高低〕。

ふむ。 「ついてるわ」〔低低低高低〕？ わっ、大阪の人だ。

「切り忘れちゃった」？

2H： 消してくれる〔低低低低低低〕。

変なアクセント！ それに、それを言うなら「切ってくれる」でしょ！

3W： はい。（リビングに戻る。）

ふむ。 Wはヒーターを切りに行った。

つまり、標準語話者で「切る」派の傍観者にとっては、当該のやり取りは、Hによる実際の発話に添いつつも、それに自らのことばを重ねて以下のように聞いていると見られるのである。以下では、注釈的な内言は省いている。

プロトコル5：標準語話者で「切る」派の場合の理解の内実

1H： あ、ヒーター、ついてるわ〔低低低高低〕。 消してくれる〔低低低低低低〕。

あ、ヒーター、切り忘れちゃった。 切ってくれる。

2W： はい。

はい。

最後に、データをデータ1に戻し、傍観者として標準語話者で「切る」派で、「デロンギ」を知っているが自らは「ヒーター」と呼んでいる人を想定すると、その主体によるデータ1のやり取りの理解は以下ようになる。ここでは傍観者は1Hの発話を、「あ、ヒーター、切り忘れちゃった。切ってくれる」と聞き換えている。

プロトコル6：標準語話者で「切る」派で、「デロンギ」を「ヒーター」と呼ぶ人の理解の内実

1H： あ、デロンギ、ついてるわ。 消してくれる。

あ、ヒーター、切り忘れちゃった。切ってくれる。

2W： はい。

はい。

2. 当事者の理解

2-1 理解と相互行為実践の展開

上で議論したさまざまな主体が W の立場になったときに、各主体は W のように反応できただろうか。これについては、取りあえずは、主体 3 以外は反応できただろうと見てよいだろう。ちなみに、主体 3 が W の立場になったときのやり取りは次のように変わったであろう。

プロトコル 7 : 主体 3 の場合

1H : あ、デロンギ、ついてるわ。消してくれる。

2X : えっ、「デロンギ」って、何？

3H : ヒーター、ヒーター。

4X : ああ。(リビングに戻る。)

では、主体 3 以外の主体は実際の W のように何気もなく反応できたであろうか。これについては、主体 1 以外は「否」であろう。主体 1 以外では、各々が傍観者であったときと同じように心の中で言い換えをしたり注釈的な内言を経験したりしながら H の発話を聞きつつ、表面的には W と同様の反応ができただろうと予想される。つまり、それぞれ前節で斜体字で示されたような内言を伴いながらもそれを押し殺して、W と同じような反応をしようと思えばができただろうと予想されるのである。ただし、そこで生じた内言に伴って顔の表情が変化して、「はい」という応答にも陰影が表れることは十分に予想されることである。つまり、実際の W のように何気もなく反応することはできないはずである。

そうした心の動きが応答として外言化される可能性もある。その場合は、内言が外言化されて発話として表面に現れるわけであるから、実際のやり取りの姿も当然変わる。例えば、プロトコル 2 の主体 4 の場合では、以下のように実際のやり取りが展開される可能性がある。他の主体を W に据えた場合でも、内言が外言化された場合の相互行為実践の展開の様子を確認してほしい。

プロトコル 8 : 主体 4 の場合

1H : あ、ヒーター、ついてるわ。消してくれる。

2Y : ああ、切ればいいのね。

3H : うん。

4Y : はい。(リビングに戻る。)

以下は、主体 2 のように「デロンギ」を知っているがそれを自身は「ヒーター」と呼び、「デロンギ」と呼ぶことに気取りを感じる人が、W の立場になった場合である。ここでは内言の動きが若干の戸惑い等として表面に現れ、H がそれらの言葉とそれに伴う顔や声の表情の意味を読み取って応答した場合である。5H の「ヒーターね」は、2Z における若

干の戸惑いと4Zの「んん」に伴う若干の表情の曇り気づきそこでZにおいて何が起こったかを感知したHが、2Zの「ああ」の背後にある「デロンギ、ヒーターね」を承けて行った発話だと見ることができる。

プロトコル9：主体2の場合

1H： あ、デロンギ、ついてるわ。

2Z： ん？ ああ。（小声）

3H： 消してくれる。

4Z： んん。（若干の表情の曇り）

5H： ああ、ヒーターね。

6Z： はい。（リビングに戻る。）

2-2 対峙する意識

バフチンは、言語活動（言語・発話）の真の現実とは、言語形態の抽象的な体系でもなければ、モノログとしての発話でもなく、「ひとつの発話と多くの発話とによって行われる、言語による相互作用〔コミュニケーション〕という、社会的出来事」（バフチン, 1980, p.208）であると言う。つまり、言語的交通（原文のロシア語で、*rechevoe obshchenie*）こそが「言語の根本的な実在の仕方」（バフチン, 1980, p.208）であるとするのである。そして、言語的交通において発話と応答が演じる相互作用について次のように論じている。関連部分を2カ所引用する。

じっさい聴き手は、ことばの（言語上の）意義を知覚し理解しながら、同時にそのことばに対して、能動的な返答の立場をとるわけだから。すなわち、そのことばに賛成もしくは不賛成である（全面的に、あるいは部分的に）、そのことばを補足し応用する。そのことばを遂行しにかかる、という具合に。しかも聴き手のこの返答の立場は、彼が耳をかたむけ理解するプロセスの全体にわたって、始めから、時には文字どおり話者の最初の言葉から形づくられる。生きた発話の理解はどれも、能動的な返答の性格をもつ（なるほど、能動性の度合いはじつにさまざまだが）。どのような理解も返答をはらみ、なんらかのかたちでかならず返答を生み出す。つまり、聴き手が話者になる。……したがって、現実におこなわれるどのような全一的な理解も、能動的な返答なのであり、返答（どんなかたちで実現されるにせよ）のための準備段階にほかならないのである。話者自身もまさに、そのような能動的な返答としての理解をあてにしている。彼が期待するのは、受動的な理解 — それはいわば他人の頭の中につくり出される自分の考えの模像にすぎない — ではなく、返答、賛同、共感、反駁、遂行その他である。（バフチン, 1988, pp.131-132）

いかにささやかなものであれ、言葉のうちでこそ、あらゆる発話のうちでこそ、心理的なものとイデオロギー的なもの、内面的なものとの、生き生きとした弁証法的な総合が、常に、繰り返し実現されるのです。いずれの発話行為においても、主観的経験が、それとしては消滅し、外部で発せられた言葉＝発話という客観的事実に転化しております。他方、外部で発せられた言葉も、遅かれ早かれそれに対する応答を生み出すためには、それに応える理解の行為の中で、主観化〔内面化〕されるものです。……いずれの発話も、方向を異にする様々な社会的な〔価値の〕アクセントが交差し、闘い合う小さな舞台です。発話はたった一人の人間の口から発せられた場合でさえも、相違なる社会的な力の生きた相互作用の所産です。（バフチン、1980. p.86）

2-1 で論じたようにさまざまな主体がWの立場に立ったとき、言語的交通は元々のHとWの場合とは異なる姿を見せる。それは、バフチンが言うように、発話は「方向を異にする様々な社会的〔価値の〕アクセントが交差し、闘い合う小さな舞台」だからであり、言語的交通が「相違なる社会的な力の生きた相互作用の所産」だからである。

そして、重要なことは、言語的交通の「小さな舞台」で「交差し」たり「闘い合」ったり「生きた相互作用」を起こしたりする「様々な社会的な〔価値の〕アクセント」や「相違なる社会的な力」は、ここまでの議論ですでに示唆されているように、ことばをその素材としているのである。発話とは、「ことばとして立ち現れる人格、ことばとして立ち現れる意識 (speaking personality, speaking consciousness)」 (Holoquist and Emerson, 1981, p.434) が交差し、闘い合い、生きた相互作用を起こす小さな舞台なのである。

そうした舞台では、対話者たちのさまざまなことば＝声 (Holoquist and Emerson, 1981, p.434) が交差する。話し手の発話は、データ 1 のように何気もなく行われ、聞き取られて遂行される場合もあるし、そうではなく、プロトコル 8 のように聞き手において独自のことば＝声を呼び起こすこともある。また、聞き手のことば＝声は時にはプロトコル 8 のように外言として現れ、他の場合には内言として潜行する。そして潜行した内言は、時にはプロトコル 9 のように相手に聞き取られて応答され、時には気づかれることもなくいかなる形であれ言語的交通の表面に浮上しないこともある。

2-3 他人の視点、共同体の視点

バフチンは、言語活動（言語・発話）の真の現実について次のようにも論じている。

発話が話し相手を志向するということは、大変大きな意味をもっております。発話とは、実際、**2つの面をもった行為**です。それは、**誰の発話であるか**という面と、**誰にむけられた発話であるか**という面と、この2つの面から規定されているのです。発話は、それ自体が**話し手と聞き手の相互関係から生まれた所産**なのです。いずれの発話も、「他者」との関係の中にある「人間」を表しております。発話の中で、“私”は他人の視点

から、さらに、最終的には“私”の属する共同体の視点から、自らを形づくります。発話・言葉は、“私”と他の人たちとの間に架けられた橋です。この橋は、一方の端では“私”によって支えられ、他方の端では“私”の聞き手によって支えられております。発話・言葉は、話し手と聞き手とが共有する共通の領域です。（バフチン, 1980, p.188）

データ1のHは、相手がWだからこそデータ1のように話したという側面がある。話し相手が標準語話者の場合は、Hは標準語話者のように、そして「デロンギ」という固有名を使わずに、以下のように話すこともできる。

プロトコル10：標準語話者の場合

1H： あ、ヒーター、消し忘れちゃった。消してくれる。

2Z： はい。（リビングに戻る。）

ここではHは、本来の自分の視点ではなく、現在の目の前の話し相手である標準語話者Zの視点から「自らを形づく」っているものであり、本来自分が属する共同体つまり大阪方言を話す人々で構成される共同体の視点から離脱して、標準日本語を話す人々で構成される共同体の視点から「自らを形づく」ったことになる。Hは「共有する共通の領域」について現在の話し相手であるZに寄り添ったのである。発話の契機においてHは、本来の自分の共同体の視点から自らを形づくる声とZ及びZが属する共同体の視点から自らを形づくる声という複数の声の響きを経験したことであろう。

3. 第二言語場面相互行為実践研究の困難

3-1 会話分析など

言語的交通は、現場で対峙する意識の相互作用の所産である。そこで取り交わされることば＝発話は、当事者にとっては、現下で対峙している2つの生成する意識が相互に返答したり賛同したり、時には反駁したりしながら、途切れることなく間主観的な現実を更新しつつある証である。そしてそのことば＝発話は、傍観者には、対話者たちがことば＝発話を取り交わしながら途切れることなく間主観的な現実を更新していると（傍観者に）見えさせるスピーチ（音声）のやり取りの流れとして与えられるのである。一般の会話分析や談話分析等の研究報告では、さまざまな手法で作成されたトランスクリプションが提示され、それを基に分析が進められる。トランスクリプションはスピーチを中心として作成される文字（インクのシミ）と各種の記号の集合に過ぎない。しかし、会話分析等ではそのトランスクリプションをもって、不理解や誤解のシーケンスを除いて、特定の間主観的な現実の構成と更新が行われているものとして研究報告者と読者の間で認識し合意された上で、分析が行われているのである。つまり、データとして提示されたやり取りは、研究報告者と読者の間で形成され維持される間主観的な現実の中に埋め込まれた、すでに起

こった現実として扱われ、分析の対象とされるのである。

同じ言語を共有する2者の間では、共有可能な活動領域については「話し手と聞き手が共有する共通の領域」(バフチン, 1980, p.188)を持ち得るという公理的な特質から、一般的で日常的な言語的交通では間主観性の状態が形成され維持されていると仮定することは支持して差し支えないだろう。しかし、その仮定は第二言語話者がかかわる言語的交通でもそのまま当てはめることができるだろうか。

3-2 第二言語場面相互行為実践

例えば、分析のためのデータとして、標準語に切り替えたHとイタリア人で入門的な日本語のみを習得しているIとの間で行われた次のようなやり取りが採集されたとしよう。

プロトコル 11

1H: (玄関で靴を履きながら) あ、デロンギ、消し忘れちゃった。消してくれる。

2I: はい。(リビングに戻る。)

このやり取りで果たして日本語話者同士の場合に仮定することができたのと同様の間主観性の状態が形成されていると言えるだろうか。Iはイタリア人であるので「デロンギ」を認識することができ、あとはHの声の調子と文脈で判断して、理解したように応答し適切に行動できたのではないかと疑われる。また、以下は筆者が採集した第二言語場面相互行為実践のデータである。Sが第二言語話者で、Oは日本語母語話者である。

データ 2

255 S: クリスト人は、ローマ、ローマ帝国、ローマ帝国ですか?ローマ帝国時は、クリスト人は危なかった、クリスト人の生活は、

256 O: 貧しかった

257 S: 貧しかった

258 O: ええ。

259 S: だから、あそこに、

ここでは、256でOが先行するSの発話を引き継いで「貧しかった」と言い、257でSはそのOの引き継ぎを繰り返して、258でOが257Sの発話を承諾した形になっている。257のSでは特段自信なさげな音調や表情は観察されていない。このシークエンスで、間主観性の状態が形成されていると即座に見なすことができるだろうか。データ全体でのやり取りからSの現在の日本語力を推測した者は、にわかにはそのように判断できないはずである。

4. 結論

端的に結論を言うと、言語を共通にする者同士の通常の相互行為実践では、能動的理解（バフチン, 1980, 1988）をする場合にその内実となっているのは当該の言語であり当該の言語のことばという姿で立ち現れる内言である。また、発話を実行するときにはその発話は常にそして既に内言に支えられているのである。簡潔に言うと、通常の相互行為実践では対話者たちは、外言の形であれ内言の形であれ、当該の言語でできたことばを充満させながら相互行為実践を行っているのである。これに対し、第二言語の話者が第二言語で行われる相互行為実践に参加するときにはそのような状況が保障されないのである。第二言語話者とは、相互行為実践で使用されている言語のことばが相互行為実践の各契機で十分に充満することなく、相互行為実践に参加する者なのである。

第二言語習得の関心から第二言語話者がかかわる相互行為実践を研究する者は、第二言語場面相互行為実践を表面に表れて起こっていると見える発話や出来事としてのみ研究するのではなく、相互行為実践のただ中にある第二言語話者の心的経験にまで踏み込んでそうした経験と相互行為実践の様態との関連を追究しなければならない。そうでなければ、第二言語場面相互行為実践と第二言語習得の真の関係を明らかにすることはできないであろう。そして、そうした研究はまだ緒についていないと言ってよい。

注

- ¹ 現実世界の実名を使用するのは本来は控えるべきであるが、本稿の論の展開のためにぜひとも必要なので、実名を使用している。
- ² その証拠に、例えば「切る」派の主体がこのやり取りで何が起こったかを他の人に報告する場合、話されたままをそのまま伝えるということを強く意識しない限り、「HはWにヒーターを切るように頼み、Wはそれを了承してヒーターを切りに行った」と報告するだろう。

参考文献

- ミハイル・バフチン著、佐々木寛訳（1988）「ことばのジャンル」『ことば 対話 テキスト』ミハイル・バフチン著、伊藤一郎他訳、新時代社
- ミハイル・バフチン著、北岡誠司訳（1980）『言語と文化の記号学』新時代社
- Hall, J. K. (1995) (Re)creating our worlds with words: A Sociohistorical perspective of face-to-face interaction. *Applied Linguistics* 16: 206-232.
- Holquist, M. and Emerson, C. (1981) Glossary for *The Dialogic Imaginations: Four Essays by M. M. Bakhtin*, Holquist, M. (ed.) (1981), translated by Emerson, C. and Holquist, M. Austin: University of Texas Press.
- Volosinov, V. N. (1973) *Marxism and the Philosophy of Language*. Translated by Matejka, L. and Titunik, R. Cambridge, MA: Harvard University Press.